愛猫ラッキーを突然の病で失って、私はもう二度と猫は飼うまいと心に決めた。ラッキーは自宅の軒下に打ち捨てられていたのを長女が見つけた。長女はすがるような目で、彼女の小さな両手に収まるぐらいの、まだ目も開いていない三毛猫を飼っていいかと私に言った。否と言ってしまえば長女の純粋な憐憫の情を損なってしまうような気がして、私は『お前が責任を持って面倒見るならいい』と言って飼うことを認めた。しかしわずか 120g 程の生まれたての子猫を飼うのは娘たちには難しすぎる。私は友人の獣医師をしている寺内君の指導、援助を受け、固形食を食べられるようになるまで私が面倒を看ることにした。５ｃｃの注射器を使っての授乳や母猫が子猫にするような世話をした結果、何とか危険な幼齢期を乗り越えることができた。

それからラッキーはかけがえのない我が家の一員になった。特にラッキーの存在が大きかったのは共稼ぎの我が家にとってラッキーは小学校から帰ってきた娘たちの良き遊び相手となり、一抹の寂しさを紛らわせてくれたことだ。

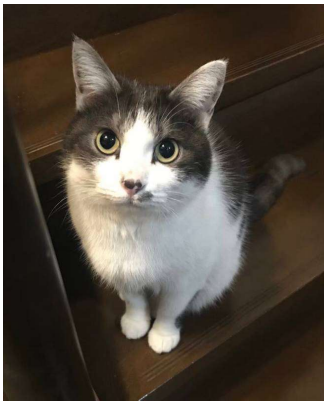
それから１４年ラッキーは二人の娘とともに大きくなった。遊び相手から解放された頃からラッキーは春には木漏れ陽のあたる窓際に長い尻尾を枕にひがな一日寝て過ごし、冬は炬燵の中で丸くなった。そんな平穏な日々が続いた後ラッキーは突然旅立った。いつも私が座っている場所で息をしていないラッキーを大学生になった次女が見つけ電話をかけてきた。私は出先から取って返し、その足で寺内君が院長をしている動物病院に妻の運転で向かった。私はラッキーが蘇生することを信じて祈りを込めて心臓マッサージを施し続けた。しかしラッキーは寺内君の懸命な治療の甲斐もなく天に召された。私は自分の子を失ったような喪失感に苛まれ、こんな辛い思いをするのならもう二度と猫は飼うまいと心に決めた・・・。

私は３０年以上中学校の教職にある。２年生を担当するとき決まって苦労するのは職場体験学習・・・通称宮っ子チャレンジウィークー・・・の受け入れ先の確保だ。知人友人らの人脈を利用し生徒の意に沿う職場を探さねばならない。特に動物医療関係の人気は高く毎年数人が必ず希望する。そんなとき便利なのは高校時代の同級生だった。近年寺内君は獣医師会の副会長という役職に就き何かと忙しく、職場体験学習の受け入れを断ることも多いと言う。しかし私が電話をかけると「お前に頼まれたんじゃ断れねえな」と言って快く引き受けてくれるありがたい存在である。この年も例年のごとく電話をかけ３人の生徒を引き受けてもらった。

職場体験学習当日私は生徒の仕事ぶりをカメラに収めるため寺内動物病院に向かった。

「生徒たちはよくやっている」との寺内氏の言葉にほっとする。被写体になっている生徒たちは動物看護師からのアドバイスに従いゲージに入った動物たちに給餌していた。そんなとき私の耳元で「また猫飼う気はないか」と寺内君が囁いた。私は即座に「ない」と答える。彼もすぐにラッキーを失ったときの私のことを思い出したようだ。「もうそろそろいいだろ」彼の言葉に私は生返事を繰り返す。さらに彼は続けた。「そこのゲージにいる猫『保護猫』なんだ。誰か里親やってくれないかな」見るとゲージの中で三毛猫と白黒の八割れ猫が２匹檻も破らんばかりに駆け回っている。元気と言ったらこの上ない。そのときである。生徒のひとりが世話をするため扉を開けた。すると白黒の八割れ猫が扉を飛び出し生徒の腕から丸めた背中、そして私の腕を駆け上がり肩の上に乗った。私はおそるおそるその猫に手を伸ばしてみた。まだ産まれて間もない薄い毛しか生えていない腹を触ると震えるような心拍を感じた。その一瞬では私はこの猫を飼うと決めた。「この猫、俺のところで飼うよ」改めて手元に引き寄せ抱いてみた。その猫は嫌がらずに手の中に収まっていた。「先生飼うの」と生徒が振り向きざま私に尋ねた。私は頷いて見せた。「猫って言うのは飼い主自分で選ぶんだよな」と寺内君。確かに人の縁も動物との縁も相手が選んで初めて成り立つのかもしれない。

その日以来その白黒の八割れ猫は我が家の一員となった。名は映画に出てきた主人公の愛猫『ナナ』からとってナナと名付けた。ナナは外来人誑しの猫で妻も瞬く間にそのかわいらしさ、愛らしさに籠絡されてしまった。面倒をかけさせられるのさえ苦にはならないようだ。私が胡座をかいているとナナはどこからかやってきて静かに胯座に収まる。ナナはピンと長い尾をたて『撫でろ』とせがむ。私はナナの背中をゆっくりと撫でてやる。すると何度も私の膝頭に頭を愛おしそうに擦り寄せる。こんな時間私は至福の喜びを感じる。

こんな時ふと思うのは定年退職後の自分の姿だった。様々な不安もないわけではない。多分定年退職して空虚な時間を持て余してもナナと一緒なら何とかやっていけそうな気がする。これからは保護したはずの猫に癒される日々があるのだと思うと自然に頬がゆるんでしまう。

保護猫はいつまでも感謝の心を忘れないらしい。